国際芥川龍之介学会 ISAS 第５回研究集会のご案内

国際芥川龍之介学会 ISAS 第５回研究集会を開催致します。開催は「対面」式で行いますが、オンライン会議システム Zoom を用いたライブ配信も予定しております。ただし、インターネット環境の状況により配信が不安定になる恐れがございますので、あらかじめご了解願います。なお、参加者には原則として事前登録をお願い致します。

記

日時　2024 年 3 月 30 日（土）　13：30～16:45 予定
会場　大阪大学中之島センター　セミナー室７A
アクセス　https://www.onc.osaka-u.ac.jp/access/
登壇者
◇研究発表　13:35～14:35
李慕遥氏（大阪大学大学院人文学研究科日本語日本文学専攻・院生）
題目「芥川龍之介「虱」論――＜越境＞する物語として読む――」

◇研究集会運営委員会企画「芥川龍之介資料をめぐる諸問題」　14:35～15:20
庄司達也氏（横浜市立大学教授）
題目「「芥川龍之介直筆資料」をめぐるいくつかの課題
― 研究の「場」に与える直接・間接の影響という観点から」
◇研究集会運営委員会企画「研究を聞く」　15:30～16:30
細川正義氏（関西学院大学名誉教授）
題目「芥川龍之介文芸における〈祈り〉　我々の心を燃え上らせるクリストを求めずにはいられない」
開催方法　対面およびオンライン会議システム Zoom でのライブ配信
配付資料　開催日の前日までに PDF ファイルを参加者にお送り致します。
当日は会場に印刷したものを 30 部用意致します。
事前登録　対面またはオンラインでの参加を希望される方は事前登録を行ってください。
登録方法は学会ホームページでお知らせ致します。
対面での参加者は、当日、会場でも受け付けます。
その他　「出張依頼状」が必要な方は、研究集会運営員会までお知らせください。

問合せ　akutagawakenkyushukai ★ gmail.com
こちらは研究集会運営委員会宛のメールアドレスです。
学会事務局宛のものとは異なりますのでご注意ください。
ご利用の際には、★を＠に替えてください。

以上

発表要旨

李慕遥氏「芥川龍之介「虱」論――＜越境＞する物語として読む――」

「虱」に関する先行研究は、主に作者芥川の創作意図や周辺の要素に焦点を当て、テクストにおける権力関係とその裏にある「歴史」を見逃しているという問題がある。本発表ではテクストを非権力者たちの「稗史」として分析し、＜越境＞する視点から再評価する。そして、虱と人間の関係性をジル・ドゥルーズの生成変化の概念で考察し、テクストをポストヒューマンの文脈に位置付け直す可能性を探る。

まず、語り手が物語の現在から隔たった時点から出来事を語り直していることを確認する。虱は侍たちが乗船する前にすでに船内に存在するため、人間の歴史と共に、動物の歴史もあると考えられる。すなわち、非人間中心的な歴史の書き方はテクストに存在している。次に、ドゥルーズの「群れ」の概念を参照し、虱たちの群れに森という個人の人間主体性は不安定であることを分析する。森が虱に生成することによって、異質共生の形であらゆる主体化、中心化を脱構築し、既成権力を反抗することができる。そこに国家暴力ないし家父長制に対する抵抗のあり方があると考えられる。

しかし、森の虱を飼う行為に対して、井上は「たはけ」と罵ったことには、権力によって作り上げた「正常」と「異常」の境界線が窺える。井上の言動には、「人間」の規範とそこから排斥される「動物」という構造が明らかである。このような「動物」と「人間」との位階秩序によって、虱を食うことが正当化され、人間の動物に対する侵略や搾取も「正常」と見做される。これは権力者が主権の維持のために恒常的に殺人を必要とすることと一致している。すなわち、異質なものの排除によって「正当な殺人」の論理が成立するのである。したがって、物語背景としての長州征伐、あるいは語り手のいる「今日」（一九一〇年代）の暴力問題は可視化されていく。

森の動物への生成は、「人間」と「動物」の境界の崩壊を意味し、動物を人間の意味の世界に従属させるアレゴリーから解放することを示している。それに対して、井上の言動は人間性＝主体性を中心化し、かえって権力への従属を強めてしまう。井上のように権威に従う姿勢を的確に暴き出しているところに、「虱」というテクストの可能性が存在すると思われる。そして、虱という経済価値もなく軍用価値もない、人間による「資源化」のできない動物の表象から、人間の知による統治、訓育できない動物を、人間中心主義ではない形で再読する意義を提示したい。

庄司達也氏「芥川龍之介直筆資料」をめぐるいくつかの課題

―研究の「場」に与える直接・間接の影響という観点から」

数年前より、芥川龍之介の直筆資料に関するデータベースを構築する作業を続けています。また、芥川龍之介関連資料が多く含まれる「葛巻文庫」を蔵する藤沢市文書館（神奈川県）との協働で、芥川資料の修復にも取り組んでいます。遅々とした歩みながらも所蔵調査や資料の分析作業を進めていると、簡単には解決されないだろうと思われる多くの問題点が見えてきます。今回の報告では、そのような中で気付いた、「芥川龍之介直筆資料をめぐるいくつかの課題」について、参加される皆さんと「情報を共有する」ということを目的としたお話をしたいと考えています。

芥川龍之介は、文学館や資料館のみならず国内外の多くのコレクターたちが、原稿、書簡と云った直筆資料や初版本などの所蔵（所有）を求めている人気作家の１人です。そのため、研究者たちが「資料」と呼ぶ品々が「商品」として古書市場にも出やすいところがあり、資料情報も他の作家に比べて整理されているように見受けられます。ただ、そのような状況の中、直筆資料をめぐる看過できない問題のあることに気付くことも少なくはなく、それらは、芥川研究という「場」に対しても直接、間接に影響している（くる）ことと受け止めています。

現段階では、報告の項目を以下のように予定しています。

①芥川龍之介直筆資料をめぐる現状　――文学館、資料館に関わる報告
②芥川龍之介直筆資料をめぐる現状　――書籍（全集、資料集を含む）に関わる報告
③真贋ということではない、他者の筆跡を持つ「芥川龍之介原稿」について
④「芥川龍之介」という窓から見ることにより、誤った認識が生じやすいことについて
⑤その他

当日は、今回の報告に関連する資料を持参して閲覧に供し、会場にて参加される皆さんと共に、具体的な事例として検討を加えたいと考えています。なお、本報告の性格上、オンラインで参加される方々には、全ての画像資料を提供することのお約束はできかねることを、予めお断りしておきます。事情ご推察の上、ご了解ください。

細川正義氏「芥川龍之介文芸における〈祈り〉

我々の心を燃え上らせるクリストを求めずにはいられない」

二〇二二年一二月一七日に関口安義先生がご逝去された。ある学会からの依頼で先生のご著書『生誕一三〇年・没後九五年　時代を拓く芥川龍之介』の書評に取りかかった直後だった。万感の思いで書評を書いたが、私にとっては遺言を読むような印象で取り組んだ。

私が関口先生と初めて個人的にお話しさせていただいたのは一九九七年五月に東京経済大学で日本キリスト教文学会全国大会が開催された時の懇親会だった。親しくさせていただいた期間は長くないが、私は研究者として、とりわけ芥川研究において、先生の芥川論と研究姿勢にかけがえのない矜持をいただいた。その核になるのは、キリスト教信仰に篤い先生が芥川の最後の作品『続西方の人』に対して「この「我々の心を燃え上がらせるクリスト」に、最晩年の龍之介は確かに出会っている。／エマオの旅人の心は、この時、確かに芥川龍之介によって共有されていたのである。」(『この人を見よ』）という確信を持った言葉であり、もう一点は、『生誕一三〇年・没後九五年　時代を拓く芥川龍之介』にも「芥川はこれまで論じられてきたような、暗く、人生に否定的に接した作家ではなかった。現実の社会に強い関心を持ち、当時の検閲制度と誠実に向き合った作家、現実の人生から目を離さず、格闘した作家だったと言ってよい」と示された「〈人生と闘った作家〉として肯定的に捉え」る視点である。本講演では、関口先生から学んだ芥川研究の視点で次のことを話したい。

（１）芥川のキリスト教に対する一番重要視しなければならないのは〈祈り〉に対する一貫した姿勢であると考える。芥川文芸に〈祈り〉が登場するのは一九一〇年頃に執筆されたとされている『老狂人』の秀馬鹿である。以来『歯車』の「神よ、我を罰し給え。怒り給うこと勿れ。恐らくは我滅びん」――こう云う祈祷もこの瞬間にはおのずから僕の唇にのぼらない訣には行かなかった。」に到るまで多くの箇所で祈りの姿勢が表現されている。特にこの箇所については佐藤泰正が「恐らくは日本の近代文学の作中に、このように痛切な深い祈りが記された箇所は殆どあるまい。」と評したことは周知のとおりである。『続西方の人』の「我々の心を燃え上らせるクリストを求めずにはいられない」もまさに痛切な芥川の祈りからの言葉であると言える。

（２）「現実の人生から目を離さず、格闘した作家」としての視点では、最晩年の島崎藤村に対して書いた「老獪な偽善者」をめぐっての解釈で示したい。一般に芥川の「老

獪な偽善者」は藤村への批判と評価されているが、『或阿呆の一生』は「芥川龍之介の誠実な自己告白の書」であったという関口先生の観点で読めば、ここに『新生』の主人公に「「敗北」の人生を一転して芸術的に昇華しうる力」を認めた芥川の、「罪の重荷から解かれて新しく生きようとする生き方に対するある種の羨望をもって」書いたという〈生〉に対する視点を読むことが出来る。